

科目番号	52172	分類	実践助産学	履修者	高度実践助産コース	学年	1-2 配当セスター 通年	
科目名	助産所実習 (Clinical Practice of Maternity home)							
担当者	○平出美栄子、橋本 美幸 関屋 伸子、小島奈都子	区分	助産師プログラム	必修	単位	6	時間数	270
授業の概要および目標						学位授与の方針との関連		
1. 実習のねらい 助産所において実践されている助産モデルの助産ケアを学び、自己の診断力・実践力を強化するとともに、医学モデルによる妊産婦管理に加え、自らの助産活動にどのような変革の可能性があるかを考察する。また、助産所の経営管理の実際をとおり、開業権を生かしたこれからの助産師の働き方について考察する。さらに、助産所と連携する行政施設、医療施設、民間団体、自助グループ等の活動を知り、母子および家族を支援する地域母子保健システムを総合的に理解する。 *助産モデル：妊娠や出産を正常で生理的なプロセスととらえ、女性の産む力を尊重した非介入的なケア 医学モデル：妊娠や出産を常に機能不全になる危険性が高いプロセスととらえ、医療で管理すること						○	1. 自律して自然分娩の支援ができる能力	
2. 実習目標 1) 助産所における妊産褥婦・新生児に対する生理的なプロセスの維持・促進・逸脱予防の助産ケアの根拠を理解し、実践できる。 2) 女性とその家族をエンパワメントするケアを説明し、実践できる。 3) 開業助産師の業務範囲、助産所の経営管理の実際を理解し説明できる。 4) 助産所と連携する関連諸施設、他職種連携について理解し、説明できる。 5) 自らの助産活動にどのような変革の可能性があるかを考察し、記述できる。						○	2. 院内・院外助産システムを担うことができる能力	
						○	3. 女性の生涯にわたる健康を支援できる能力	
						○	4. 周産期の救急時に対応できる能力	
						○	5. 他職種と連携・協働し、質の高い助産ケアを提供できる能力	
							6. 研究・開発能力	
							7. 倫理的意思決定能力	
3. 実習時期と場所 1) 実習期間：1～2年次 3月～4月 2) 実習場所：稲田助産院、さくらバース、とわ助産院、目白助産院、森田助産所、矢島助産院、Be born 助産院 (実習場所は変更あり)								
4. 実習方法 1) 自己の助産実践を振り返り、強化したい自己の課題から実習計画を立案し教員へ提出する。 2) 学生の実習計画に基づき、教員が各実習施設と打ち合わせし、学生にオリエンテーションを行う 3) 実習中は、学生が主体的に助産院指導者と相談し、口頭/記録物によって日々の実習スケジュールを調整、決定する。 4) 指導者と「報告・連絡・相談」を行い、チームの一員として主体的に対象の助産ケアを実施する。 5) カンファレンス： ①ディリーカンファレンスにより、自己の疑問を解決し考察を深める。 ②中間カンファレンス（実習3週目）により、学習成果から実習目標の方向性を調整する。 ③終了時カンファレンスにより（実習6週目）により、実習目標の達成度について討議する。 6) 終了後学内カンファレンスにより、学生間で学びを共有し、意見交換を行う。 7) 「自らの助産活動の変革」について、個人レポートをまとめ学びを深める。								
事前・事後学習	事前学習：関連する授業内容を復習し、必要な知識・技術を確認し臨むこと。（備考参照） 事後学習：自己の課題を踏まえ、実習で得た知識・技術の定着に向け復習すること。 単位と時間数に応じた学習時間（学生便覧参照）を参考に取り組むこと。							
評価の方法	1. 実習評価表 50% 2. 実習レポート 30% 3. 実習への取り組み（記録・出席日数） 20% フィードバックは適宜行う。							
参考図書・資料等	○産婦人科診療ガイドライン 産科編 2014：日本産婦人科学会/日本産婦人科医会、日本産婦人科学会、2014. ○エビデンスに基づくガイドライン—妊娠期・分娩期 2016：日本助産学会誌、日本助産学会、2016. ○助産所開業マニュアル 2013 年度版：日本助産師会出版、2013.							
備考	1. 各助産所のホームページから、実習施設の理念、具体的活動を理解しておく。 2. 自己の目標と課題について考えて実習に臨むこと。 3. 実習全般に関する相談は、担当教員まで連絡し解決を図る。 オフィスアワーについては、学生便覧を参照し、教員と日程調整をする。							